フリースクール

大平　浩

洋三は既に限界に来ていた。息子の亮介が不登校から始まって自室に引きこもり始めてもう十年が過ぎようとしていたのだ。亮介の年齢はもう二十歳を超えている。

そんな時、洋三は『どんな引き籠りでも立ち直る』というフリースクールの噂を聞き、藁にもすがる思いで面接に出かけた。

そのフリースクールは山の上にあり、洋三は軽の車のエンジンをヒーヒー言わせながら坂を登った。山頂へ到着すると、小さな学校のようなものがあった。車を降りてフェンスに近寄ると看板に「中村塾」と書かれていた。呼び鈴を鳴らす。

「この前お電話させてもらいました村沢です。中村淑子先生と十時に面会の約束していたんですけど」

「どうぞお入り下さい」中年の女性の声がした。

運動場を突き抜け二階建ての建物のドアを開け、洋三は階段を登った。そして二階の応接間へ行くと、髪をショートカットにした五十代くらいの「おばさん」が座っていた。

「私が中村です」

「お電話させていただいた村沢です」

名刺交換の後しばしの沈黙が流れたが、その沈黙を破るように中村塾長は話しかけた。

「引きこもって何年になりますか？」

「はい、十年ほどです」

「いつからですか？」

「中学一年の夏休み明けからです」

「ほほー。では年齢はもう二十歳を超えていますね」

「はい。本当に治るんでしょうか？」

中村塾長の顔が急に険しくなった。

「治る、治らないは親の腹一つですな。大体こうなるまで何をしていたのですか？」

「いや、何か言うと暴力を振るうので私も女房も手を焼いていました」

「その暴力にあなたは負けたわけや」

「いや、負けたというわけでは――」

「負けてるやないか！」

怒鳴りつけられた。そして塾長は話を続けた。

「いいですか、村沢さん。子供が引きこもるのは親の責任なんや。『私は息子の暴力に耐えてきました?』『息子が引きこもりになったのはいじめからです?』何を甘えとるのんや? 親やったら子供とぶつかって勝負せんかい! あなたは勝負したことがあるんか?」

「(なぜ私が叱られるのだろうか?)」

「今、何で私が叱られるのかと思ったやろ。いいですか、あんたは息子のことを駄目息子と思っているやろうけど、あんたかてこのままやったら駄目親や。本当に息子さんを立ち直らせる気があるなら、先ず親が腹を決めないかん。私らはそのお手伝いをさせてもらうだけや」

「あのー、でも『引き取りに家まで出向きます』と書いてあったんですけど」

中村塾長は呆れたような顔で言った。

「それが甘えや言うてんのや。確かに私も出向きますけど、ここまで連れてくるのは本来は親の仕事や。私らの仕事はその後からや。できへんのやったら帰って下さい」

それから一呼吸置いて中村塾長は噛んで含めるように言った。

「あのねえ、村沢さん。そりゃ私も家まで出向きますよ。でも一番近くで息子さんを見てこられたのはあんたやないですか。そのあんたが腹を決めてないようで、どうやって他人の私が何かできます?」

「そのー、『腹を決める』というのは具体的には何をすればいいのでしょうか?」

「はん? これや。何にもわかってない。いいですか。ここは泣く子も黙るスパルタ塾なんでっせ。そんなとこへ十年も引き籠っていた子供が喜んで来ると思いますか? あんたが腹決めて息子さんを引っ張り出すんや。暴力使ってもええ。何が何でも引っ張りだすんや。よー分かりましたか?」

やがて洋三は家へ帰った。中村塾長も一緒だ。これから何が起こるのか不安だったが、あの馬鹿息子を引っ張り出す覚悟は決めていた。そして二階の亮介の部屋の前に洋三は立つ。そして部屋で引きこもっている亮介に向かって怒鳴りつける。

「おい! 亮介、出てこい! こら! 出てこいと言ってるのが聞こえないのか?」

「何やねん、出てこい出てこい言うて。うるさいなあ」

髭も髪もボウボウの亮介が出てきた。頬にパンチを喰らわせる洋三。

「何するねん、父さん」いきなりのことに驚いた亮介が叫んだ。

「お前はいつまで父さんや母さんを苦しめるんや? 根性叩き直してやる。来い!」

亮介は裸足のまま外へ飛び出した。しかし、洋三に見つけ出され、髪の毛を引っ張っ

たまま家まで連行された。洋三は殴り続けた。

亮介の部屋の前で中村塾長が待ち構えていた。塾長はいきなり平手で亮介の頭を叩いて言った。

「おい。おいと言うのが聞こえないんか？」なぜか怖そうなおばさんがいる。亮介は思わず「はい」と言った。

「お前が何で逃げられなかったか分かるか？」

「いえ」

「何が『いえ』や。お前が十年も引き籠ってる間にそれだけ体力が落ちてしもてるのや。よう分かったか？」

「すみません」

「私にすみませんなんて言うてもしゃあない。言う相手が間違えとるやろ！」

「今私に言うたことをもう一回お父さんに言うてみ」

「すみません」

「ほんまにすみませんと思うんやったら立ち直れ！　お前は立ち直るために何かしたんか？」

「ネットやゲーム」

「何？　このボケナスが。ネットやゲームで立ち直ったなんて話聞いたこともないわ。私の塾へ来て根性入れ変えるか？」

「はい」

こうして亮介は恐怖のスパルタ塾、中村塾に入塾することになった。翌日、中村塾長の車が迎えにきた。塾に着くと 既ににスタッフが待ち構えていた。髪の毛はスポーツ刈りにして上下真っ黒のジャージを着ていた。

「村沢君ですね。あなたの担当の吉村です」

「はい。よろしくお願いします」

「何？　聞きとれん。今何て言うた？」

「よろしくお願いします」

「このボケが！　そんな蚊の鳴くような声で聞こえるかい！　言い直せ！」吉村の罵声のあと、中村塾長が言った。

「おい、ええか？　ここのスタッフは全員武術の有段者や。学校と違って体罰なんか平気でやるで」

「よろしくお願いします！」

「よし、それでええ。お前は作業の時間に散髪や」吉村が言った。

「次にお前の部屋を見せたる。二階へついてこい」
吉村に案内されて二階へ上がる亮介。これから始まることに不安の色を隠せない。びくびくしながら吉村の後を追う。
二階の三番目のドアに札が架かっていた。『村沢亮介』と書かれている。吉村とともに中へ入った。すると亮介は我が目を疑った。そこには六つの「檻」があり、全てにかんぬきがかかっていたからだ。吉村は言った。
「お前らは社会の屑や。いわばゴミや。何年間もただ飯食わしてもろうて世の中に何の貢献もしてない。そんな屑どもを飼っておくのには檻が必要なんや。元々はこんな檻なんかなかったんやけど、逃げ出す不逞の輩が居るからこれをつけたんや。こん中で今までの事反省するのにもええやろ。どうや？　夏は暖房、冬は冷房もきいてる。お前らは今まで暖房や冷房の効いた部屋で暖衣飽食してひきこもっとったんや。それがいかに有難いことかよーわかる。ここで両親からしてもうた恩をじっくり考えて自分のしたことを反省するんや。お、もう昼飯の時間やなあ。食堂行くか？あんたみたいな生活送っていた仲間がようさん居るで」
カランコロンと鐘がなる。食事が始まった。誰も喋らない。
「終了。食器洗浄。早くせんかい！　この屑どもが！」
亮介は食器を洗おうとして水で皿を流した。
「お前は食器の洗い方も分からんのか？」別のスタッフが竹刀を振り下ろした。
「痛い！」
「何が痛いや？　食器はタダやないんやぞ。ちゃんとスポンジに洗剤つけて洗うんや！そんなことも分からんのか？」
「すみません」
「すみませんと思うんやったらこのお皿様に謝れ！」
「お皿様、すみません」
「よーし、そうや。吉村先生、この屑は家で食器も洗ったことがないようやなあ」
「まあ、誰でも最初はそんなもんや。村沢君、食器を洗ったら風呂で散髪や」
やがて亮介は浴室へ連れて行かれた。
「風呂は入ってきたな？　よし、散髪や」
その時、食堂から女の子の泣き叫ぶ声と中村塾長の声が聞こえた。
「ほほー、これは脱走やな。誰か逃げ出したらしい。お前にも見せたる。どうせ今日は作業もないんや。見て行け」
吉村に言われて二人は散髪の後、食堂へ赴いた。中村塾長がまだ十代とおぼしき女の

子に竹刀を振り下ろしていた。

「この屑が。ここから逃げられると思っていたのか？　ここから出られるのは仕事が決まった時と認検に受かった時だけや。あ、吉村と新入りもいたのか。まー見て行け。逃げ出そうとしたバカタレがどうなるかや。ええか？　ここでしっかり勉強して高校卒業資格認定試験に受かって大学へ進学するか、肉体労働やけど就職が決まったもんだけがここから出られる。この屑はそれを破ったんや」

二回、三回と竹刀の音。

少女は懇願する。「ごめんなさい。もうしません」

「お前は何回逃げ出そうとした？」中村塾長が竹刀を止めて言った。

「初めてです。今日以外に逃げたことはありません」

「嘘つけ？　これで三回めやろ」

「ええか。お前はなあ、中学の時に不登校になって学校から逃げた。これが一回目や。それから引き籠って家族からも逃げた。これが二回目や。そやからこれが三回目や。お前は一生逃げる人生を送るんか？　そんなん嫌やろ。そやからここへ来たのやないんか？　まあ、こいつは一日檻に入れて反省してもらおか。飯抜きでな」

亮介は一人考える。

「（病気が治ったらバイトでも何でもして働くよ。それのどこが悪いんだ？　父さんは『いい大学、いい高校へ行け。そうすれば将来は安泰だ』と何度も言っていた。でも、それは『昭和時代』の発想だ。今では何の役にも立たない考え方だ。俺の友達にもいっぱい大学出のフリーターがいるんだぞ）」

その時、三時を知らせる鐘が鳴った。

「今から学習の時間や。中学からひきこもったあんたはついてこれんやろが、まあ勉強していけ」吉村が言った。

二人は別棟の学習室へ急いだ。亮介と同じくらいの年代の若者が近づいてくる。

「私は大学生の時に引きこもりになりました。だからあなたを教えてあげてほしいと頼まれたのです。山内と言います」

「よろしくお願いします」

「ところで教科書も何も持たないで来たのですか？」

「はい。そんなものは捨ててしまいました」

「いつから学校へ行ってないのですか？」

「中学一年からです」

「それなら基礎からやる必要がありますねえ。先ずは英語をやりましょう」

亮介は暫く英語の問題集と格闘していたが、全く手がつけられず、山内に尋ねる。「わかりません」

山内は困惑したような顔を浮かべてスタッフを呼んだ。

「先生、この人中学一年の英語が分からないようです」

吉村がやってきた。

「おい、屑。お前のことや。お前は英語の文法どころか読むこともできないのか？」

「できません」

吉村の竹刀が床を打つ音。

「偉そうに言うな。この屑が。This is a pen.　くらいは読めるやろう。それも読めないんか？」

「あのー、分かりません」

また竹刀が床を打つ音。

「お前は本物の屑やなあ。年は何歳や？」

「二十五歳です」

「あんたは学習を受けられるぎりぎりの年齢や。これより歳のいった者は作業をしている。嫌やったら、この中学一年の教科書を明日までに全部写してこい」

「あのー、できません」

「何？　できませんやと？　塾長ー」

しばらくの間をおいて中村塾長が登場する。そして亮介に言った。

「お前はこんな簡単なこともできないんか？　徹夜してでもやらんかい。部屋には灯りもついてる。やるんや。ところでお前は将来一体何になるつもりや？」

「さあ？」

「『さあ』やと？　お前なあ、このままやったらお前は本物の社会の脱落者や。将来の設計もなく、引き籠って、親が死んで、やがては野垂れ死にするんや。私らはそんな屑どもを救ってやっているんや。しかし、そのためには自分も腹くくって頑張らなあかん。『できない』なんて甘ったれたことはここでは通用せんのや！　さあ、お前は将来何になるんや？」

「小説家です」

「お前はアホか？　中一の英語も読めないような奴が小説家になれると本当に思っているのか？　ほんまにこんなアホは見たこともないわ。どないや？　ここまで言われて悔しいか？　悔しかったらこの教科書を一日で丸写しして来て見返してみい。ええか？　できなかったら懲罰や」

亮介はすすり泣き始める。

「お前は今日の学習は漢字でもやった方がええなあ。山内君、漢字のドリルを持ってきたり」

「はい！」

そこへスタッフの一人が割り込む。

「おい、こんな漢字も分からん奴が小説家やて。おい、みんな、笑ってやってくれ。これが小説家になるらしいぞ」

鐘が鳴った。

「次は社会をやりましょう」山内が言った。

「(三権分立は国会・内閣・裁判所が立法・行政・司法だな。これならできる。簡単だ。そう言えば父さんは社会の色んなことを教えてくれた。何でも学生時代には学生運動をやっていたらしい。しかし、その父が自分をこんな所に押し込めたのだ。一体日本という社会はどうなっているんだ？)」

やがて食事が終わり、反省会の時間になった。中村塾長が亮介を紹介する。

「今日一人おまえらと同じような屑が入った。こいつは小学校の漢字もよう書かんような奴や。そやけど、この前高校卒業資格認定試験に受かった森君のように『今に見返してやる』という気になってお前らもいつ抜かれるかわからん。社会というのはそういうとこや。みんなが競争してるんや。脱落者は次々と後から来たのに追い抜かれる。それが嫌やったら作業に、勉学に励むことや」

全員が「はい！」と唱和した。

亮介は思った。「(父さんは『競争社会はいけない』とよく言ってたのに、その父さんがどうして僕をこんな所に入れたんだ？)」

父の洋三は元学生運動の闘士だったのだ。競争のない平等な社会を作るために闘ってきた人間だったはずだ。

六時半、全員が大広間に集まった。ここで座禅を組むのだ。

足を組もうと格闘する亮介。そこへ別のスタッフがやって来る。

「おい、足の組み方が分からんのか？」二人のスタッフが無理やり亮介の足を二人がかりで引っ張る。

思わず亮介は「痛い！」と叫んだ。

「『痛い』やと。この屑が。周り見渡してみい。皆やってるやないか。それがお前には

できへんのんか？　お前はほんまに屑やのう。もう一回いくぞ。ほら！」足を引っ張られ、亮介は叫んだ。「痛い！　痛い！　や、め、て、く、だ、さ、い」

「おい、こいつあかんわ。しゃあない。正座や」

三十分後、中村塾長が入ってくる。そして亮介に言った。

「お前は歳はいくつや？　二十五やろ。お前と同じ歳の者はもう社会へ出て働いてる。それが何や。座禅ができんから言うて正座させたったら『しびれがきれました』やと？　普通の営業マンは注文がとれるまで二時間は正座するもんや。分かってるのか、こら」

竹刀が肩に振り下ろされる。

亮介が叫ぶ。「痛い！　僕働きます。お父さんにそう言って下さい。だからここから出して下さい！」

ところが、この言葉が塾長やスタッフの怒りの火に油を注いだ。

「お前、今何て言うた？　塾長に向かって何と言うた？」

四人のスタッフ全員が亮介の下へ集まって来た。

「『僕働きます』やと？　十年間も引き籠っていたような屑を誰が雇うんや？　それに、お前はまだ作業も何もしてない。来て一日目や。それが音を上げるならまだしも『僕働きます』やと？　お前の体は十年間で完全になまっているんや。どんな働きができる言うんや？　それを鍛え直すためにここへ来たのやないんか？　塾長、根性入れ替えしましょか？」

「そうやなあ、こんな甘ったれた奴見たこともないわ。根性棒持って来い」

中村塾長はスタッフにそう命令してから亮介に言った。

「お前はまだ作業もやってないし、英語の宿題もやってない。それが音を上げるならまだしも『僕働きます』やと？　もう一回言うてみい！」そしてスタッフが持って来た短い棒を振り下ろした。

「ぼ、ぼ、ぼ、僕働き、うぎゃー！」

「おい、こいつのトレーナーを降ろせ」

「もう一回言うてみいと言うてるんや？」

「わー。ごめんなさい、ごめんなさい」

やがて座禅の時間が終わり、反省会が始まる。塾長は開口一番言った。

「今日一日の反省を、そうだなあ、田中優斗君、してもらおうか」

「はい！　僕は今日の作業の時に二個ずつ運ぶ煉瓦を一回だけ一個だけにしてしまいました。すみませんでした」

「よろしい、誰か他に反省のある者はいないか？」

「はい」
「山口吉人君」
「僕は百回書く漢字を九十九回しか書けませんでした」
「よろしい。おい、新入り、何か言ってみるか？」
「あのー僕は、そのー、ありません」
竹刀の音がした。中村塾長が言った。
「お前、飯食うのも遅い、小学校の問題もできない。英語は宿題になったが、『できません』なんて抜かしやがったな？　それで何の反省もないのか？　座禅を組むこともできん。そして言うに事欠いて『僕仕事します』やと言ったなあ。他の連中はなあ、煉瓦を一回運ぶのが少なかっただけで反省してるのや。それが何や？　何にもできへん屑が『反省はありません』やと？　おい、今日は一言ずつこの屑に何か言え。それから順番に風呂や」
暫しの沈黙が続いたが、一人の塾生が手を上げた。
「こいつは小学校の漢字も書けない癖に小説家になりたいと思っている屑です。こいつは世の中というものが分かっていません」
「よーし、上村、よく言うた。お前は一番風呂や。行け。他にはないか？」
「はい。こいつは食器の洗い方も知りません。人間の屑です」
「よーし。よく言うた。お前は二番風呂や」
その直後、一人の塾生が言った。
「はい、僕は彼が間違っているとは思えません。なぜなら、まだ今日入ったばかりで塾のことを知らないからです」
「ほー。お前はこいつの肩を持つのか？」
「そういうわけではありません。この人は何も知らないと言ったまでです」
「吉川、お前何でこんな所に三年もいるか分かるか？　お前の根性がそんなことを考えるほど腐っているからや。そやから出られへんのや。お前はまた反省するか？」
「何でも『反省、反省』言うたらビビると思っているのですか？」
「ほほー、よう言うた。そんなに反省したいんやったら三日間反省してもらおか？　おい、連れていけ！」吉川という青年はどこかへ連行された。それを見送った後、中村塾長は言った。
「おい、新入り、引きこもりになった経緯を言え」
「ぼ、ぼ、ぼ、僕は中学一年生の時にいじめられて学校へ行けなくなりました。そして、家から一歩も出なくなり、十年間引き籠ってました」

「それだけか？　まあ、そんなもんやろうなあ。十年間も引き籠っていて社会へ出てなかったら、言えることもこれぐらいしかあれへん。きちんと社会へ出た人間は自分のストーリーと言うものを持ってるもんや。しかしこいつにはそれもあらへん。そんな屑が『小説家になる』だの『僕働きます』だの何をほざいているんや？　よーわかったか？」

「カランコロン」と鐘の音が聞こえた。

「よし。反省会終了。各自自分の部屋へ行くこと」自室の檻へ行く亮介。それを引き留めて吉村が言った。

「宿題や。徹夜してでもやれ」

亮介は電灯を点けて小さな椅子に座った。一生懸命に教科書を丸写しし始めた。徹夜してもできそうにはない。そして、暫らくすると睡魔が襲ってきた。昼夜逆転の生活を続けてきたのだから当然と言えば当然である。そして、三時頃まで眠ってしまった。

「大変だ。まだ五ページも終わってない」

「カランコロン」と鐘が鳴る。

「起床時間、起床時間」

やがて朝食後、学習の時間がやってくる。山内が言った。

「宿題はやってきてますか？　これから英語ですけど」そして亮介のノートを見て言った。

「半分しかできていないよ。これはスタッフの竹刀が飛んでくるか『反省』や。黙っといたるさかいに、とにかく英語をやりなさい」

吉村の足音がした。

「おい、お前は確か宿題を出したはずや。全部やって来たんやろうなあ？」

「それが、そのーーー」

吉村は雑巾を摘まむように亮介のノートをつまみ上げた。

「何や？　これは？　半分しかできてないやないか？　しかもあちこち間違いだらけや？　お前は勉強をなめてんのか？　この屑が！　塾長さんから『徹夜してでもやれ』言われたんでなかったんか？　お前はこれで『がんばりました』と言えるのか？　おい！」

吉村は亮介の胸倉を掴むと、その華奢な体を宙吊りにして、体を揺する。そして揺すりながらがなり立てた。

「こりゃ、反省かのう？　おい、反省するか？　おい」中村塾長がとんできた。

「吉村先生、どないしたんですか？」

「こいつ、英語の宿題、半分しかできてませんねん」それを聞くと塾長は亮介に言った。

「お前はこんなことも出来んのか？　作業に回るか？　『僕働きます』って言うたからなあ。それとも『反省』するか？　お前は一体何ができるんや？　今まで『これはやり遂げた』と言うもんが一つでもあるか？」
「ありません」
「偉そうに言うな。まあ、そんなもん、あるのやったらこんなとこ来てないわなあ。こんな屑反省させても一緒や。どないしょう」
中村塾長と吉村が、何かひそひそと話しあう。
「よし、村沢君、君は勉強なんかしても一緒や。今から作業に回れ。わしと中村塾長の結論や」
その後、亮介は年長者の作業をすることになる。
「仕方ない。お前、こっちへこい。今から花壇の所へ行くぞ」
「ここに煉瓦が置いてあるやろ。これを二個ずつ運んで積め」
「（これならできる）」と思った亮介が甘かった。
吉村が言った。「砂場まで走って持っていって五個ずつ十段積むんや。時間内にやれ。一分でも遅れたら最初からやり直し。飯も抜きや。初め！」
「大変だ、時間内にやらないと」
亮介は煉瓦を二個持つと、砂場まで猛ダッシュした。
「はい、時間。九段か？　こりゃ駄目やなあ。やり直し」
そう言って吉村は煉瓦を蹴って崩してしまう。
「もう一回これを花壇に持って行って時間内に十段積むんや」
「（これは父さんにも聞いたことがある。ナチスの拷問と同じや。ナチスは捕虜に石を積み上げさせて、それから崩してしまうんや。そう言う無意味な作業をさせて拷問するんや。人間は自分のやっていることに意味が見いだせなくなった時、最も弱り果てると、父さんも言っていた）」
亮介はその場に大の字で寝そべった。
「お前、何してる？」
「ストライキです」
「お前、アホの癖にストライキなんて言葉知ってるのか？　お前は昭和の人間か？」
「先生、僕は労働者になるんです。労働者はスト権があるんです。父さんが言ってました」
「ボケか。そんなことは本当に労働をしてから言うもんや。お前はたった一日、それも少しだけ煉瓦を運んだだけやないか」
亮介は学生運動をやっていた父から聞いた歌を歌い始める。

「聞け万国の労働者、轟きわたるメーデーの、示威者に起こる足取りと、未来を告ぐる鬨の声。ははは、何が競争社会や？　みんな競争してる？　それなら俺のように脱落した奴らはどうなるんや？　社会が脱落者を造り出したんや。政府が規制緩和の名のもとに、競争社会を作り出したんや。政府を小さくして倒れる者は倒れるに任せる。失業者を産む。そんな世の中もうたくさんだ。俺は戦うぞ！　戦って非道な資本家をやっつけるんや。万国のプロレタリアよ。団結せよ！」

「お前、ほんまに昭和の人間みたいなこと言うなあ。世の中競争社会やから仕方ないやないか？　お前はアホか？　アナクロか？」

「ははははは、うるさい！　全ての権力をソビエトへ！」

「お前、意味分かってこんなこと言ってるのか？　今は昭和やないんやぞ。負け犬は置いていかれるんや」

「うるさい！　資本家め！　聞け万国の労働者――」

「こいつ、とうとう行てもうたな？　ほんまに。来て一日で行てまう奴なんか初めてや。誰か中村塾長を呼んできて！」

「聞け万国の労働者、轟きわたるメーデーの、示威者に起こる足取りと、未来を告ぐる鬨の声。万国のプロレタリアよ、団結せよ！」

中村塾長がやってきた。

「吉村先生、こいつどないしたんですか？」

「何か昭和時代の労働歌なんか歌い始めよった。こいつあかんわ。塾長。いてもてますわ」

「お前、狂ったふりなんかしてもあかんぞ。そんな歌どこでおぼえたのか知らんが、ここは屑どもを『教育』する所なんや。お前は労働者でも何でもない。そんなことくらい分かるやろうが？」

「うるさい！　資本家め。万国のプロレタリアよ、団結せよ！」

「あかんわ。吉村先生、医務室や。医務室へ連れてってもらうか」

「わかりました。さあ、革命の闘士の僕ちゃん。今から医務室へ行くぞ」

連れて行かれる途中で何回も手足をばたばたやりながらまだ歌っている亮介。

「立て、飢えたる者よ。今ぞ日は近く、覚めよ我が同胞、暁は来ぬ。暴虐の鎖断つ日、旗は血に燃えて、海を隔てつ我ら、かいな結びゆかん、いざ闘かわん。いざ。奮い立ていざ、嗚呼インターナショナル、我らがもの、いざ闘わんいざ、奮い立ていざ、嗚呼インターナショナル、我らがもの」

やがて亮介は医務室とやらへ到着した。医務室には頑丈な鉄格子があり、その中にベッドが置いてあるだけであった。塾長が言った。

「お前はどうも悪いことをしたと思ってないようやなあ。ええか。お前はスタッフや他の塾生に迷惑をかけたんや。それから英語の宿題もできてなかった。作業に回してやったら昭和の革命歌なんか歌いやがって狂ったふりをしたな。そんなもんがこの泣く子も黙る中村塾で通用すると思っているのか？　ここが反省房兼医務室や」

そして間もなく亮介は一つの『檻』の中へ入れられた。仕方なく亮介は革命歌を歌っていた。

「聞け、飢えたる者よ今ぞ日は近く、覚めよ我が同胞、暁は来ぬ」

「誰よ、うるさい！　眠れないじゃないの」女の子の声がした。

「いや、良い歌や。覚えてますか？　吉川啓治と言います。あなたをかばってここに入れられた男です。あなたは、まだ来たばかりでよく知らないでしょうが、この塾では平気で体罰を行います。あの竹刀で叩かれるんです。昨夜も竹刀を持ったスタッフがやってきて僕達を竹刀で小突いて眠らせないようにするのです」

よく見ると、昨日逃走しようとして失敗した女の子と、亮介を助けようとして「反省」させられた少年であった。

「今少しの我慢や。もう少しでここから出られる。そして作業の時間に逃走するんや」

そして、また足音が聞こえてきた。座禅と反省会が終わったのだろう。スタッフの一人が『竹刀』と『根性棒』を持って独房へ入ってきた。入るなりスタッフは言い放った。

「屑どもが三人そろっているな。お前は逃げ出した馬鹿か？」

「わー。ごめんなさい、もうしません」

スタッフはそう言って女の子の頭を竹刀で何回も殴りつけた。

「こんな檻の外からでは叩きにくうて困るわ。おい、出ろ。根性棒や」

叩かれるたびに女の子は「ごめんなさい」と言う。

「よし、田川はもう一度独房へ入れ。代わってこいつにおしおきや」スタッフの刃は今度は吉川に向かった。

「仕事も勉強もできんと口ばかりは大きい奴やのう。その口じゃ。お前はその口でどれだけ皆に迷惑かけてきたんや？　どうせ三人で逃げ出す算段でもしよったんやろが！何話してたか言うてみい！」

そう言ってスタッフは何度も吉川を根性棒で叩く。田川が懇願した。

「やめて下さい、死んでしまいます。やめて下さい」

「おうおう。結構な友情やなあ。『やめて下さい』やと？　そんなこと言われたらもっとやりとうなってくるわ。おい！　屑！　何を三人で話しとったんや？　言うてみろ！」

「今度はお前じゃ。革命の闘士の僕ちゃんよ」亮介の番である。叩き始めた。

「痛い。肩の骨が折れる。許して下さい」
「許してほしかったら、もう一度お前の下手くそな革命歌を歌ってみろ」
「立て、飢えたる者よ。今ぞ日は近くー。覚めよーーー痛い！　やめて下さい」
「お前はこの今の日本で革命が起こせるとでも思っているのか？　この馬鹿たれが」吉川が仲裁に入った。
「やめてやって下さい。そいつは何も知らないんです」
「お前、まだ反抗する元気が残っていたんか？　そうか。こりゃこんな根性棒だけではきかへんなあ。ちょっと待っとけ」
やがて金属バットを持ってくるスタッフ。
「お前はこれで根性入れ替えたる。新入りは中へ入れ。吉川、出てこい」
吉川の背中めがけて金属バットが振り下ろされた。
「反抗する悪い奴は死んでしまえ。ぶっ殺したる」
金属音が何回かする。しばらくしてからスタッフは言った。
「ああ、こりゃあかんわ。またやってもた。こいつ死んでもうた」反省房を出るスタッフ。暫くしてから二、三人のスタッフと中村塾長がやってくる。塾長が言った。
「山本先生、またやってしもたんかいな。先生方、こいつを毛布にくるんで谷底に転がしてやってくれ。他の塾生に見られんようにな」そして亮介と田川に鬼のような形相で言った。
「おい、新入りと田川。こいつは逃げだそうとして谷底へ落っこちて死んだんや。わかったか？　このことを一言でも言うてみろ。お前らも同じ運命やぞ」

そして翌日、塾長が亮介を呼び出して告げた。
「おい、屑。昨日見たことは誰にも言うな。もしも言ってみろ。お前は昨日の吉川と同じ目にあうぞ」
「はい」
学習時間。田川に近づいて耳打ちをする亮介。
「脱走しよう。二人で逃げて警察へ行こう」
「嫌よ。見つかったら吉川君のように殺される」
「いいか、これは革命なんや。こんな所にいるよりも殺された方がええとは思わないか？」
それから暫くしてから中村塾長が入ってきた。
「村沢君、お父さんが面会に来てるから出てきなさい。それからええか？　親父さんに

おかしなこと喋るんやないぞ。私も面会室にいて見てるからな。間違っても『体罰を受けました』とか吉川君のことなんか話すんやないぞ。そんなこと話したらお前は一生出られへんからな。何か聞かれたら『勉強も運動も楽しいです。ひきこもってた間に勉強や運動がこんなに楽しいものやとは思わなかった』いうて言うんや。わかったか？」

「はい」

二人は食堂へ着いた。ここで面会があるらしい。ドアを開けて中へ入ると既に洋三は待機していた。

「まあまあ、お父さん。よくいらっしゃいました。彼もいよいよやる気になってきたところです。おい。何か言うことはないのか？」

「亮介。ここでの生活はどうや？」洋三が尋ねる。すると亮介はとんでもないことを話し出した。

「僕、働きますからここから出して下さい」

「え？　どういうことや？」

塾長は一瞬狼狽して洋三に言った。

「いや、初めてここへ来た者はみんなこう言うんです。彼もまだ慣れていないようですが、慣れたら高校卒業資格認定試験を受けたり仕事をし始めたりします」

「へー、そんなものですかいな。亮介は見込みがあるのですか？」

「勿論、見込みはあります。ただ、体力がまだついてないのと、学力が中一のままなんで、これからですなあ」

「わかりました。亮介、しっかりやるんやぞ。勉強や運動は楽しいか？」

中村塾長が鬼のような形相で亮介を凝視する。あまりの怖さに亮介は言われた通りの答えをする。

「勉強も運動も楽しいです。ひきこもっている間に勉強や運動がこんなに楽しいことが分かりませんでした」

「そうか、それやったらええ。一生懸命がんばるんやぞ」

「はい」

「それではお父さん。あそこに見える建物が学習棟なんで、見ていって下さい」

「わかりました。亮介は？」

「私が後で連れて行きます」

父親が出て行くと中村塾長の顔が急に険しくなった。そして残された亮介に言う。

「お前、今何て言うた。なめてんのか！」

亮介にビンタを喰らわせる塾長。

「言われた通りに言え言ったのに『僕仕事しますからここから出して下さい』やと？お前は反省が足りんのか？」

またもやビンタが数回続く。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「ごめんなさいと思うんやったら何であんなこと言うた？　ここをどこやと思ってるんや？　ここは泣く子も黙る中村塾やぞ。お前も吉川みたいにしたろか？　それとも吉川に何か入れ知恵でもされたんか？　かわいそうになあ。あいつは今頃谷底や。ええ？何か言うてみい」

「わー、ごめんなさい。もう言いません。勉強も頑張ります。助けて下さい」

「あかんなあ、ちょっと待っとけ」

そこに立てかけてあった竹刀を持ってきて亮介の顔面を思いっきり叩く中村塾長。竹刀の音がビンと唸る。

「どないじゃ、痛いか。痛いと言うてみい」

中村塾長は肩ではーはーと息をしながら言う。

「これからお前の親父さんが勉強を見にくる。お前はきちんと勉強ができるか？」

「はい。できます」

「それやったら今から学習室へ行くからついてこい。さっきみたに変なこと言うてみろ。吉川みたいになるぞ」

「はい」

こうして亮介と塾長は学習棟へ向かった。その頃、洋三は学習棟で勉強の様子を見ながら二人が来るのを待っていた。学習棟では勉強の遅れている者を進んでいる者が見ていた。洋三がいるのでスタッフはいつものように竹刀を振るったり大声を出したりしなかった。だから、普通のフリースクールのようであった。そこへ中村塾長と亮介が入ってきた。亮介が着席すると、山内がいつものように横へ座り、小学校六年生用の問題ドリルを持ってきた。

「今は数学の時間です。外部の人がいるので、今日はスタッフも何も言いません。安心して勉強して下さい」

「はい」

洋三は勉強の様子を見て感心しながら言った。「みんな一生懸命やってますねえ。ここなら安心して子供を預けられる」

「『父さん、これは嘘です。本当はスタッフが竹刀で殴りかかってくるんです。たてついたら殺されるんです。助けて下さい』」

そして洋三は亮介に近づいて来て言った。「よくやっているやないか。しっかり勉強を教えてもらうんやぞ」

「はい（『ここではいと言わなければ殺されるんだ』）」

洋三は感心した。あのひきこもりの亮介が一生懸命勉強している。こんな姿は見たことがない。

「いやー。感心しました。この子がこんなに勉強している姿は初めて見ました」

「ここへ来たらみんな雰囲気でそうなるんです」

「『これがかつて学生運動で暴れていた父なのか？　何が感心しただ？』」

「では、私はこの辺で失礼します」

洋三が出て行った。途端にスタッフの顔つきが変わり、いつものように竹刀を持ってきた。

やがて、作業の時間になった。十時から十二時まで作業である。二五歳までの少年少女が花壇の近くに集まった。この時間は『大人のひきこもりさん』も作業をしているはずだ。だから、いつもよりスタッフの数は少なかった。スタッフはたったの二人で作業の指示を出し、それを見守るのだ。もしも逃げ出すとしたらこんな絶好の機会はない。亮介はそう思った。また、亮介は既に覚悟を決めていた。例え捕まって殺されたとしても、これは革命であり、革命に殉じた英雄になれるのだ。そう思っていた。そこへスタッフの声がかかる。

「それでは男子はレンガ積み、女子は花壇の手入れや。気を抜く奴は『反省』やぞ。先ずは男子は一人に二つずつレンガを持ってきて積む。女子は清掃と水やりや。ええか？」

塾生全員が「はい」と唱和する。

スタッフの罵声が飛んでくる。

「気を抜くな！　もっとキビキビと動け！」

やがて一時間も経つとスタッフは座り込んでタバコをふかし始める。その隙をぬって亮介は花壇の中にいる田川にそっと囁く。

「今がチャンスや。逃げるんや」

「嫌よ。あなた、自分の言ってることが分かっているの？」

「ああ、分かってる。大真面目や。こんなやり方間違っている」

丁度、花壇の裏手のフェンスに穴が開いていた。亮介は音を立てないように田川の手を取ってフェンスの穴を通り抜けた。そして二人で走りに走った。亮介は田川に言った。

「とにかく民家を探すんや。そこで電話で警察を呼ぼう。昨日のを見たやろう？　あれ

は明らかに殺人や」

「きっとスタッフが追ってくるわ。そうしたら私達吉川君のようになるのよ」

「そんなことは後でいい。とにかく道路はまずい。山の中へ逃げ込もう」

大きな笛の音がする。脱走を知らせているのだろう。何度も笛が鳴る。

ここで止まっていてはまずい。とにかく逃げられるだけ逃げよう。そう思い、二人は獣道を全力で走った。行く先々が茨で塞がれている。それを傷つきながら払いのけ、二人は走った。民家なんかあるはずがない。山の中で木々が生い茂っているだけだ。これならば見つかるのも時間の問題だろう。しかし、諦めずに二人は走った。すると、炭焼き小屋のようなものが見えてきた。

「ここで夜を明かそう。鉄格子よりはましや」

やがて西日も傾いてきた。夜だ。普通、女と男が夜を明かすというと、何かあると思うのが普通だが、亮介も田川も何をしていいかさえ分からなかった。そこで二人は話を始める。

「君はまだ十代だと思うんやけど、どこから来たの？　言葉からすると関西の人間ではないように思うんやけど」

「私、東京から来ました。私ひきこもりじゃないのよ。ただ、学校へは行かずにリストカットやオーバードーズを繰り返していたら親が勝手にここへ入れたの。カウンセラーは『生きているだけで十分。存在そのものを認めてやって下さい』と言ったのだけれど、世間体を気にする親がここへ入れたの。姉がいて都内の一流私学に通っているの。それと比較されて親から色々と言われたわ。それから私、学校でいじめられていたのに親は何もしてくれないの。先生も見て見ぬふり。こんな世の中しらふで生きていけない」

「そうか。僕は村沢亮介。中学一年生の時にいじめられていたのに親も教師も何もしてくれんかった。そこで医者へ行ったら『社会不安障害』なんて病名をつけられたんやけど、学校へ行ってもいじめられるだけやし、約十年間ひきこもっていたんや。そしたら親にここへ入れられた。ひきこもっている間もずっと不安だった。友達が高校へ行ったり大学へ行ったりしている中で自分だけ取り残されているようで。でも親は『早く一人前になれ。誰それはもう大学へ行っているのに』とかばかり言われた。僕の親は会社員で、大学時代は学生運動をやっていたんや。そやから革命歌なんかいっぱい知ってる。それからひきこもって最初の間は親を殺そうと何回も思った。でもそのうちにそんな元気もなくなってきた。僕の友人でも大学を出たけれどフリーターをやってる奴なんかいくらでもいる。みんな競争に負けたんや。なのに両親はきちんと高校・大学へ行けと言うんや。大学さえ出たら就職なんかいくらでもあると思っているんや。今やひきこもり１００万

人、派遣は就労者の４０％、ニート８５万人、若年無業者２００万人や。誰がこんな世の中にしたんや。競争に負けた俺なんかどうなるんや？」

その後、二人は黙り込んでしまった。そして夜が明けた。まだ見つかっていないようだ。そう考えて二人は山の尾根に沿って山を下って行った。すると民家があるではないか。二人は一目散でそこへ逃げ込んだ。すると人の良さそうな麦藁帽子を被ったおじさんがいた。二人はおじさんに同時に言った。

「助けて下さい。誰か助けて下さい」

「君らは何や？　どうしたんや？」

「僕らは中村塾から逃げてきました。あそこは殺人をやっています。すぐに警察を、警察を呼んで下さい」

おじさんが１１０番してくれた。そして間もなく警察が到着する。

中村塾の周りを警察車両が取り囲んでいる。マスコミも来ている。そしてその中に亮介の父親の洋三もいた。亮介もいた。田川さんの両親も東京から駆けつけていた。

洋三は呟いた。「ここがそんな塾やったとはなあ。亮介、すまないことをした。もう高校へ行けとか働けなんて言わないから帰ろ」

中から中村塾長が手錠をかけられて出てきた。洗脳されていた塾生もこの事態を固唾をのんで見守っている。

洋三は一人呟いた。

「自分が大学を出た頃とは時代が変わっている。この亮介は中学時代にひどいいじめにあったが、俺は『もっと強くなれ』と言うだけでこの子が発しているＳＯＳに気づいてやれなかった。また、いじめられているのに無理矢理制服を着せて学校へ行かそうとした。何という親だったのだ。もしも亮介が自殺でもしたらどうするつもりだったのだろうか？『とにかく生きていたらいい』とどうして全肯定してやらなかったのか？　また、『誰々が大学へ入った』とか『誰々が就職した』とか、何てむごいことを言ってきたのか？この亮介がひきこもりの最初の頃に暴れたのはそんな俺に対する反抗だったんだ。そして、青少年の死因の１位は自殺だ。もしもいじめで自殺しても学校は『いじめはなかった』と言ってもみ消しにかかるだろう。とにかく今は生きていてさえいてくれたらいいんだ。最後のこんな惨い塾に入れてまで立ち直らせようとしたのは間違いだった」

やがて洋三の車に乗って亮介は『古巣』へ帰っていった。